

4 研修報告

肢体不自由のある生徒の主体的な学びを引き出す授業づくり — 考えの交流を促す言語活動の充実を図る指導の工夫を通して —

広島県立広島特別支援学校 高牟禮 龍

研究の要約

本研究は、肢体不自由のある生徒の主体的な学びを引き出すことを目的としている。所属校生徒は、脳性まひや脳外傷による体幹機能障害を有している。授業では、発語の不明瞭さや活動経験の少なさがあり、グループでの話し合い活動で消極的な場面が見られるなど、受動的になっている。文献研究から、肢体不自由のある生徒には、「動作」「感覚や認知」「経験や体験」に応じた指導・支援が必要であることが分かった。また、肢体不自由のある生徒の主体的な学びを引き出すためには、障害特性を踏まえること、単元の展開の構造化を図ること、予想場面等を取り入れた話し合い活動を設定すること、自分の考えを表現させ、伝え合わせ、発展させるといった考えの交流を促す言語活動の充実を図る指導を実施することが大切であると考え、授業を実施した。その結果、肢体不自由のある生徒が、話し合い活動を通じて自分の考えを表現し、お互いの考えを伝え合い、考えを発展させることができた。このことから、考えの交流を促す言語活動の充実を図る指導の工夫を行うことは、肢体不自由のある生徒の主体的な学びを引き出すことにおいて、有効であることが分かった。

I 研究の基本的な考え方

1 主体的な学び

文献研究から、主体的な学びを引き出す授業づくりにおいて、生徒が課題を把握し解決への見通しをもつことが重要であると考え。また、自ら課題に気付くことにより、主体的に課題追究することができると考える。

2 肢体不自由のある生徒の学習上の困難さ及び指導・支援

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所（平成24年、以下「特総研」とする。）は、「肢体不自由のある児童生徒の医学的起因は様々であるが、多くの場合は脳性まひをはじめとする脳性疾患によるものである。脳性まひは、脳の病変の部位や広がりによって、運動障害のほか、情報処理能力や視知覚・視覚認知能力（目と手の協応動作の困難、図と地の弁別の困難、空間認知の困難等）等に影響を与える場合があり、学習する上での様々な困難が生じる場合がある。」と示している。

また、山根亨一（平成30年）は、「肢体不自由のある生徒は、動作の困難により、取組に時間が掛かることが分かる。」と述べている。また、「物事の全体像の把握や、多くの情報を同時に処理することが困難であり、教科学習に影響があることが分かる。」と述べている。さらに、「学習内容の理解、表現する意欲及び表現する方法に課題があることが分かる。」と述べている。

これらのことから、肢体不自由のある生徒は学習

する上で、取組に時間を要すること、物事の全体像を把握しにくいこと、多くの情報を同時に処理しにくいことに困難さがあり、学習内容を理解し、表現しにくいことから、主体的な学びになりにくいと考える。

指導・支援の方法については文献研究から、肢体不自由のある生徒の主体的な学びを引き出すためには、「動作」「感覚や認知」「経験や体験」に応じた指導・支援が必要であることが分かった。

3 考えの交流を促す言語活動の充実を図る指導 (1) 言語活動の充実

平成31年度広島県教育資料では、「『主体的な学び』を促す教育活動として、自ら課題を見付け、課題の解決に向けて探求的な活動をしていく『課題発見・解決学習』を推進していく。」と示されている。また、この「課題発見・解決学習」において求められるものとして、「言語に関する能力の育成を重視し、各教科等において言語活動の充実を図ることが大切である。」と示されている。

さらに、「専門研究B 肢体不自由のある児童生徒に対する言語活動を中心とした表現する力を育む指導に関する研究—教科学習の充実をめざして—平成22年度～23年度研究成果報告書」（特総研、平成24年）では、「肢体不自由のある児童生徒においては、障害の特性に配慮して、言語活動の充実により『表現する力』を育むことがとりわけ肝要である」と述べている。

これらのことから、主体的な学びを引き出すには、言語活動の充実を図ることが大切であり、生徒の表

現力等の育成につながると考え、本研究では「考えの交流を促す言語活動の充実を図る」視点を以下のように整理し、授業研究を進めた。

- 自分の考えを表現することができたか。
- 話し合い活動で考えを伝え合うことができたか。
- 話し合い活動で考えを発展させることができたか。

研究授業前後にアンケートを実施した結果、全ての視点に応じたアンケート項目で数値の上昇が見られた。このことは、「考えの交流を促す言語活動の充実を図る」指導を行うことは、主体的な学びを引き出すことに有効であったと考える。

(2) 授業での「共有化」及び単元の展開の工夫

村田辰明(2013)は、「話し合い活動を通じて、一人の児童生徒の社会的見方・考え方のよさを全員に広げることが『共有化』と言い、誰でも自由に話せる雰囲気をつくるのが大前提である」と述べている。このことより、生徒が社会科の見方・考え方でお互いの考えを深めるためには、予想場面、価値判断場面、仮定場面を取り入れた話し合いが必要であると考え。肢体不自由のある生徒は、経験や体験の少なさがもたらす学習上の困難さがあることから、これら予想場面等が特に有効であると考え。

また、村田(2019)は、「子ども自らが、モチベーションを維持しながら、授業や単元に臨めるようにするには、『展開の構造化』が有効である。」と述べている。「展開の構造化」とは、展開をブロック化し、ある程度パターン化することであり、展開が構造化されることで、児童生徒は問題解決のゴールはどこなのか、次は何をするのかが分かるので、見通しをもって安心して学習に臨むことができる。また、展開の構造化において、キーとなるのは「問い」であり、単元など内容や時間のまとまりを見通した「問い」を設定する必要がある。さらに、授業の中での「問い」を生徒の生活経験や既有知識と結び付けることで、関心を引き出すことができると考える。

このことから、生徒に見通しをもたせ、安心して学習に臨ませ、展開の構造化を意識して「問い」を設定し、話し合い活動を設定することにより、考えの交流を促す言語活動の充実を図る指導を実施することができる。と考える。

このことは、経験や体験の少なさがもたらす学習上の困難さがある、肢体不自由のある生徒にとっても有効であると考えた。

(3) 「授業のユニバーサルデザイン化モデル」

授業において、全員参加、全員理解を促す方法と

して、日本授業UD学会(2012)が提唱している「授業のユニバーサルデザイン化モデル」の考えを取り入れる。

「授業のユニバーサルデザイン化モデル」とは、多様性に応じた包括的な授業設計のことである。方法には、問いや内容や活動を絞り込む「焦点化」、資料を加工したり生徒の思考を見える化したり効果的に視覚的情報を用いる「視覚化」などを行って授業を展開していくことなどがある。これらのことは、話し合い活動がより活発化し、生徒同士の参加度や理解度の差に対して有効であり、授業での生徒同士の「共有化」を図ることができる。と考える。

II 研究のまとめ

1 研究の成果

- 考えの交流を促す言語活動の充実を図る指導の工夫を行えば、肢体不自由のある生徒の主体的な学びを引き出すことができることが分かった。
- 肢体不自由の障害特性を踏まえた上で、予想場面等を取り入れ、本時の適切な「問い」を設定し話し合い活動を充実させていくことや、「授業のユニバーサルデザイン化モデル」の考えを取り入れた焦点化、視覚化、共有化などが有効であることが分かった。

2 研究の課題

- 今回は社会科の授業においてのみ、考えの交流を促す言語活動の充実を図る指導の工夫を行ったが、他教科等での授業実践を行うことで、さらに汎用性を高める必要がある。と考える。
- 肢体不自由のある生徒に対する、「授業のユニバーサルデザイン化モデル」の考えを取り入れた授業づくりの有効性を、継続して検証していく必要がある。

【引用文献・参考文献】

- ・ 文部科学省(平成28年)：『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)』
- ・ 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所(平成24年)：『専門研究B 肢体不自由のある児童生徒に対する言語活動を中心とした表現する力を育む指導に関する研究—教科学習の充実をめざして—平成22年度～23年度研究成果報告書』
- ・ 文部科学省(平成30年)：『特別支援学校学習指導要領解説各教科等編(小学部・中学部)』開隆堂出版
- ・ 山根亨一(平成30年)：「肢体不自由のある生徒の論理的に説明する力を高める数学科指導の工夫」『平成29年度(全・後期)教員長期研修研究発表会』
- ・ 広島県教育委員会(平成31年)：『広島県教育資料』
- ・ 文部科学省(平成30年a)：『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説社会編』東洋館出版社
- ・ 村田辰明(2013)：『社会科授業のユニバーサルデザイン』東洋館出版社
- ・ 村田辰明(2019)：『実践！社会科授業のユニバーサルデザイン展開と技法』東洋館出版社